

イル・フォルリオ・クオティディアーノ（イタリア全国紙）

「イル・フォルリオ・デッラ・モーダ」ファッションインサート

2026年2月5日 p.8

## 禅と書道の芸術

ブルーノ・リーヴァ氏とカティア・バニョーリ氏との対談。リーヴァ氏は舞台美術家、バニョーリ氏は翻訳家（ブレット・イーストン・エリスやジョイス・キャロル・オーツなどを手がける）です。二人は文字の芸術への情熱を育てて、それをファッションではなく「心の地震計」へと高めました。ただしアルマーニ、バレンチノ、グオ・ペイなど、ファッション界が漢字の持つ美しさに常に魅了されて来たのも事実です。4月には二人が関わる展示会がミラノで開催されます。また今回二人は2月のテーマ「独自性」を踏まえ、ファッション誌「イル・フォルリオ・デッラ・モーダ」にテーマにちなんだ作品を寄せてくれました。

---

トニー・ディ・コルチャ

---

1990年代半ば、多くの方がナギコ（映画『ピーター・グリーンウェイの枕草子』の主人公）に共感しました。彼女は透き通るような肌に詩を書かれることで喜びを得ました。彼女は恋人たちをその愛の技量よりも、彼女の肉体を常に変化し続ける書物へと変貌させる技量によって評価しました。また観客の中には、ヴィスコンティの映画のような美貌を持つ天使のようなジェローム（ユアン・マクレガー）に共感し、その洗練された、知的で胸躍るようなエロティシズムに浸る人もいました。当時はデジタルコミュニケーションがその後普及するほどには至っていませんでしたが、すでに紙とペンに触れる機会がますます少なくなっていた私たちは、ピーター・グリーンウェイと彼の「枕の物語」に魅了されて映画館を後にしました。手が文字を書くことで美を生み出すことができること、そして白い紙も、発見し、征服し、愛すべき肉体と同じくらい香り高く、魅力的なものであることに気づきました。その魅力はごく短期間しか続かなかったものの、書道の方は芸術の一形態として今もなお人々を魅了し続けています。カティア・バニョーリ氏とブルーノ・リーヴァ氏のビジョンから生まれた今月号の「イル・フォルリオ・デッラ・モーダ」の表紙がそれを証明しています。

「4つの文字で構成されています」とリーヴァ氏は説明します。「墨で書かれた漢字と、赤色の円（円相）を組み合わせました。4つの文字は『唯一無二』、つまり一つであり二つではないこと、そして全体における唯一無二さ（つまり折り込み広告や新聞は結局のところ共同制作物です、編集者注）を意味しています。一方、円は宇宙の絶対性の象徴であり、したがって現象の全体性、二元性の超越、つまり空虚や無を包含する全体の唯一無二性を意味します。」

ミラノ出身のバニョーリ氏は文学翻訳家であり（ブレット・イーストン・エリス、ジョイス・キャロル・オーツ、ジェフリー・ユージェニデス、ウィリアム・バロウズなどの作品のイタリア語版を翻訳）、1980年代後半に東アジアを旅したことで書道に興味を持つようになりました。彼女は東京にある日本教育書道連盟およびアート・オブ・インク国際協会に所属しています。一方、リーヴァ氏は舞台美術家およびインテリアデザイナーの教育を受けましたが、同時に30年以上も書道と篆刻を実践しています。彼のパフォーマンスは、その動作に詩情と神聖さを強く伴っています。2013年にはミラノのピッコロ劇場で60平方メートルの空間を使って表現しました。また2013年、バニョーリ氏とリーヴァ氏は、日本でも最も権威のある書道展のひとつである読売書道展に西洋人アーティストとして初めて出品し入選しました。深い絆で結ばれた二人は、お互いを尊重しながら交互に答えました。「私たちは、2つの頭を持つ1匹の動物のようなものです」とバニョーリ氏は冗談を言い、西洋ではもはやペンを手に持つことさえない中、彼らは書道の動作の唯一無二性、再現不可能性を称賛しています。「手書き文字が完全に廃れていくという現代の状況は悲しいことに事実です」とバニョーリ氏は指摘します。西洋の書道と中国・日本の書道はまったく異なります。人々をアジアの書道という視覚的言語に引き付けるのは、私の考えでは、その力強さ、即時性であると思います。なぜなら、一筆一筆が唯一無二であり、繰り返すことができないものであるからです。また、そこにはゆっくりとした動作と意識、身体との接触、美しいものへの観察と模写があり、そして書道という挑戦は私たち自身と向き合うことを可能にしてくれます。もはや手書きでグリーティングカードさえ書かない人々にとっても書道は魅力的なものとなっています。この芸術は身体への回帰、時間を超越した時間、そして完成品や目標達成への欲求を捨てその過程そのものを楽しむという点で効果的で機能的なものであり、ここ数年皆が好む禅の美学を超えたものです。イタリアの人々が日本のあらゆるもの（「ジャパン・パッケージ」）に強い関心を示していることについてどう思うかと尋ねると、二人は侘び寂び、無常、不完全といった深く複雑な概念についてイタリアの人々が時に表面的に語ってしまうと言って微笑みました。少なくとも書道に取り組む人々を観察することで理解できる範囲では、人々は本質的に、技術を学ぶために必要な動作の反復の中に平穏と静寂を求めています。なぜなら、人々は成功と仕事上の成果を必死に追い求めるあまり、押しつぶされそうになっているからです。書道は確

かにこの「日本パッケージ」の一部であり、スローな時間や意識への欲求こそが、その起源を特定することは困難であるものの最も魅力的な要素のひとつです。主な関心は、実際には禅、例えば鈴木俊隆と鈴木大拙貞太郎の講義、そしてビートジェネレーション、1950年代のアーティスト、アンフォルメル、アクションペインティングが形式と理論を日本にもたらしたことです。彼らは形や理論をもたらし、理論的な観点から非常に重要な交流がありました。

書道の魅力はファッションの世界にも広がり、崇高な対話を生み出しています。「その永遠の次元において、私たちは紀元前200年にさかのぼる絹の断片を現代に蘇らせることができます。唐の絹では、文字は装飾としてだけでなく、社会的地位を示すためにも用いられていました。それは着用された真の話し言葉の文字でした。そして日本では平安時代、つまり最も栄華を極めた1000年頃、宮廷貴族の着物は手描きで和歌が全面に書き記されてきました。抽象的な形として使われる場合もあれば、完全に読みやすい文字として使われる場合もありました。そして僧侶が着用する経文が描かれた僧衣もあります。ケンゾー、ヤマモト、イッセイミヤケ、そしてディオールのジョン・ガリアーノやカール・ラガーフェルドなど、中国と日本の書道を装飾としてではなく、その力強さや絵画的な表現のために活用したファッションデザイナーたちを思うと、書道は何千年もの時を超えて、たとえ素材は進化してもその本質は変わらないまま、その目的も変わらないままであります。そしてその影響はストリートウェアだけにとどまりません。街を埋め尽くす若者たちのスウェットがそれを証明しています。ヴァレンティノ、アルマーニ・プリヴェ、中国人デザイナーのグオ・ペイのファッションショーでは、貴重な素材で書かれた漢字が使用されてきました。筆跡や書道の視覚的な力は何世紀にもわたって持続し、ファッションは何世紀も前からそうであったように、それを表現し、変化させ続けています。

来年4月、二人はミラノの複数の会場で作品展を開催します。4月28日と29日に2つの異なる会場、それは展示会に参加している陶芸家エカテリーナ・デ・アンドレイスのスタジオがあるヴィア・プリニオと、もう一つはモスクワ通りにあるファッションデザイナー、クリスティーナ・トマのメゾン・トマのスペースです。ここで「蓮の月」と題し、18世紀末に生まれた有名な女流詩人、陶芸家、書道家である大垣蓮月（おおたがきれんげつ）に捧げる展示会を開催します。「私たちは、この展覧会を彼女に捧げることにしました」とバニョーリ氏は強調します。「私たちのコレクションの一部である彼女のオリジナルの書道作品、私たちや他のアーティストが蓮月を称えて制作した作品、そしてブルーノと私が書を彫り込んだ陶器などを展示します。今回も日本領事館の支援を受け、同領事館の展示会スペースにも作品を展示することになりました。」またリーヴァ氏は語ります。「線の中に残るのは、その行為の後に繰り返されることのない瞬間の記録です。書道には臨書とい

う実践があり、それは技術を学ぶ上でも基本的なものです。しかし、臨書において一つ一つの動作は唯一無二です。それは、その瞬間の自分の姿、感じ方、感覚の記録です。震えやドアがボタンと閉まる音さえも作品に刻まれます。書道は心の地震計のようなものです。」

---

記事名：禅と書道の芸術

出版物：Il Foglio Quotidiano

著者：TONY DI CORCIA

開始ページ：8 終了ページ：8

ブルーノ・リーヴァ

ルガーノに生まれ、ミラノの美術アカデミーで学んだ若い頃から、東アジアの芸術と向き合う。日中間の書道と篆刻の研究者であり、これらのテーマに関するエッセイや評論を執筆している。Aistugia（イタリア日本研究学会）会員。文化協会「shodo.ch」創設者。日本教育書道連盟（東京）会員。第30回読売書法展入選。スイスとイタリアで教鞭をとる。中国、韓国、日本、アメリカ、タイ、ヨーロッパで書道パフォーマンスを行い、個展やグループ展で作品を発表している。

カティア・バニョーリ

ミラノに生まれ、同地に在住し、文学翻訳家として活動している。ウェブサイト shodo.it の創設者兼コンテンツマネージャー。1980年代後半に東アジアを旅行した際に書道に出会い、夫のブルーノ・リーヴァとともに、書道講座や会議、国際展覧会を開催し、書の普及と研究のために活動している。日本教育書道連盟（東京）会員。第30回読売書法展入選。ヨーロッパ、アジア、米国で展覧会を開催している。